

中央銀行の政策転換と為替レート

スウェーデンの中央銀行であるリクスバンクは、マイナス金利を最初に導入した(09年)中央銀行だが、昨年政策金利をマイナス0.5%からマイナス0.25%へ引き上げた。そして今年中にマイナス金利を終了し、金利正常化への道をたどる構想を描いていた。

だが今日の政策委員会での引き上げの見込みは少ないどころか、今年中の引き上げの見込みも立たなくなったようだ。金利の引き上げに慎重な発言が政策当局者から出てきた。

こうした変化はスウェーデンに限ったことではない。オーストラリアの中央銀行(RBA)も次の金融政策の変更は利上げだと公言しながら、最近の政策委員会では利上げを見送るばかりでなく、住宅市場の変調や海外リスクの増加など景気減速のリスクを指摘するようになった。この点はスウェーデンの事情と重なる。

つまり金融政策に関して世界の潮流に変化が見られるわけだが、こうした変化に大きな影響を与えたのが米国のFEDであることは言うまでもない。

継続的な利上げシナリオを描いていたFEDが利上げに慎重な姿勢に転換した。貿易戦争やBREXITなど対外要因をネガティブなリスクとして指摘した。

政策当局に対する金融市場の反応は、フェドファンドの先物レートから類推する限り、今年はもちろん来年初めころまでは現行レートが続く可能性がぐんと高まった。当初は年末来年初には利下げの可能性もある程度あったが、最近では利下げも利上げも見込む市場参加者が減った。

為替レートとの関連で見れば、ドル金利の変化の可能性が減少するにつれてドル相場は堅調になってきた。金利差が固定化すれば高金利通貨に資金移動しやすいからだ。その点ではスウェーデンクローネもオーストラリアドルに対してもドルは金利面から当面堅調に推移する可能性がある。